

R3-19

被災地域の高等学校と連携した防災学習

- 管内 根室管内
- 分類 避難訓練 危険対応能力 防災訓練 その他（ ）
- 教育課程 教科（ ）科 道徳 総合的な学習の時間 特別活動
- 校種 小学校（低） 小学校（中） 小学校（高） 中学校 高等学校
- 取組のポイント

- 1 羅臼町の支援により、日本国内の高等学校で2校にしかない「災害科学科」を設置している宮城県多賀城高等学校から生徒を招き、東日本大震災における津波被害の実情を直接聞く場面を設定した。

■取組の実際

ねらい

- 東日本大震災を経験した同年代の高校生を講師として招き、災害の実態等についての講演を聞くことを通して、本校生徒の防災意識を高めるとともに、被災時に求められる行動等について知見を高める。

内容

1 東日本大震災を経験した高校生による講演の実施

- 演題を「環境に配慮し災害時に役立つ食の提案」として、宮城県多賀城高等学校の生徒による講演を実施した。

実際に災害を経験した高校生の視点からの提案により、日常的な備えについて考えるきっかけとなり、本校生徒の防災意識を高めることができた。

<生徒の感想（一部）>

- ・ 3.11の災害ことは、決して忘れてはいけないと再確認する機会になった。
- ・ 高校生の目線に立った説明であったため、災害時の対応等について理解しやすかった。



【講演の様子】

2 津波が起こった場合の避難方法についてのグループディスカッションの実施

- 講演を実施した後、災害発生時に学校が避難所となることを想定し、望ましい避難所には何が必要か等について、ハザードマップを活用しながら、生徒同士で考えを交流した。

また、新型コロナウイルス感染症対策等を踏まえた避難について、活発にアイデアを出し合う様子も見られた。

<生徒の感想（一部）>

- ・ 通学時に災害が発生した場合の対応の仕方について自分たちで考えている多賀城高校の取組が参考になりました。
- ・ 3.11以降、津波の到達水位を街の電信柱に提示している取組が印象に残りました。



【グループディスカッションの様子】

成果と課題

- ハザードマップを活用したグループディスカッションでは、事前の講演により、生徒は災害を自らの問題と認識し、主体的な態度で参加することとなり、生徒の防災意識を向上させることができた。
- 学校行事としての単発的な取組とすることなく、継続的な意識付けを行っていくために、防災学習が組織的かつ教科等横断的な視点による取組となるよう校内体制を整備する必要がある。